

2025 年 10 月 26 日 説教「聖霊をけがす」

ルカの福音書 12 章 1～12 節

11 章後半では、パリサイ人や律法の専門家の問題性をイエスは鋭く指摘されました。律法や細則を盾にして、外側の行動にこだわる彼らにイエスは内側のきよめこそが大切であることを教えられました。

1. 弟子達への訓戒（1～3 節）

- ①パリサイ人のパン種 (1) 「**そうこうしている間に、おびたしい数の群衆が集まって来て、互いに足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに対して、話しだされた。『パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善のことです。』**

イエスの周りには人々が集まってきました。愛と恵みに満ちた教えと、いやしや奇蹟を人々は求めていました。そんななかでも、イエスは弟子たちに対する教育を大切にされました。ここでは、「パリサイ人のパン種」に気をつけよと言われます。彼らの考え方の根っこに注目せよということでしょう。そこには偽善があるということです。問題点はマタイ 23 章に満載されています。

- ②隠されているもの (2) 「**おおいかぶされているもので、現わされないものではなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。**

その中身には強奪と放縦があり、それが白く塗った墓のようであった（マタイ 23:25、27）とあります。それは必ず露わになるとイエスは言われます。律法を守ることと善をなしていると自負していたとしても、その偽善は必ず外に現われて来るということです。

- ③暗やみで言ったことが (3) 「**ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家の中でささやいたことが、屋上で言い広められます。**

彼らの内々で語られていたことや、なされていたことで、外にはもらしたくないことがあったとして、それらは必ず明るみになるといわれます。それは皆の間で言い広められることになるということです。それほどに、パリサイ人や律法の専門家の実状は、律法の本義からかけ離れたものになっていたのだと思われます。

2. 全知全能の神を恐れよ（4～7 節）

- ①恐れなければならない方（4～5）「**そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。**

弟子たちへの教えは続きます。何を恐れるべきかという課題について述べられます。イエスは恐れるべきは人間ではないと明言されます。人間は人間の肉体を奪うことはできます。しかし、人間ができることはそこまでです。神は死後のことを治めておられる方で、人を死後にゲヘナに投げ込む

権威を持っておられるのです。そのような権威と力を持っておられ方をこそ恐れるべきなのです。

- ②雀の一羽でも (6)「**五羽の雀はニアサリオンで売っているでしょう。そんな雀の一羽でも、神の御前には忘れられてはいません。**」

弟子達に神観を教授される主は、たとえをもってそのご慈愛を示されます。五羽でニアサリオンとありますが、一アサリオンはデナリ(労働者の一日の賃金)の 16 分の1です。本当に安価で売られている雀のことを、神は忘れずに、覚えていてくださるのです。

- ③頭の毛さえも (7)「**それどころか、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です。**」

イエスの教えられる神は全知全能なる方です。その方は、弟子達に向かって、「あなたがたの頭の毛さえも数えておられる」と言われます。それこそ無数とも思われる私達の髪の毛の数すら知っておられる神は、私達の心の中の様々なことをも知っておられるのです。雀より優れた者として造られた私達を、神は見守ってくださっているのです。恐れるべきはこのような神であることが確認されます。

3. 聖霊の導きを尊ぶ (8～12 節)

- ①イエスを認める者は (8～9)「**そこであなたがたに言います。だれでも、わたしを人の前で認める者は、人の子もまた、その人を神の御使いたちの前で認めます。しかし、わたしを人の前で知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。**」

弟子達への教えは続きます。ここでは人の前でイエスを救い主として認めるかどうかという課題です。認めるならば、人の子(キリスト)も御使いたちの前で認めてくださるが、もしイエスを認めないならば、御使いの前でキリストも知らないと言われるというのです。

- ②聖霊を冒瀆する (10)「**たとい、人の子をそしることばを使う者があっても、赦されます。しかし、聖霊をけがす者は赦されません。**」

まだ神を知らない人が、キリストに対してそしるような言葉をはくようなことがあっても赦されるというのです。しかし、既にキリストを知り、その恵みにあずかっているものが、そこから離れていくとするならば、それは聖霊をけがすことで、それは決して許されることはないというのです。

- ③聖霊が教えて下さる (11～12)「**また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようと、何をどう弁明しようか、何を言おうかを心配するには及びません。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです**」

弟子達にはもう一つの課題として、彼らが官憲やユダヤ人会堂に連れて行かれて、彼らがどのような者であるかを弁明しなければならない時についてです。そのような時には、何を言おうかと心配する必要はないと言われました。聖霊が語るべきことを教えてくださるからだというのです。

《展開と結論》

今朝の聖書箇所から三つのことを学んでいきたいと思います。

第一に全知全能の神についてです。

今朝の聖書箇所においては、雀一匹一匹のことを関心もってくださっている神は、一人一人の人間についてはそれ以上に愛してくださると言われています。また、その方は私達の髪の毛の数も知ってくださるほどに、私達の何から何まで知っていてくださるというのです。知るということに関心があるということです。関心があるということは愛することにつながります。しかし、大事なことです。その大きな愛を受けようとせず、むしろ拒否するようなことがあれば、当然ながらせつかくの特別のご愛をいただくことはできません。ここでは弟子達に語られ、いかなることがあっても、全知全能の神がついてくださるのだから、人を恐れず、深い愛の主こそ恐れなさいと命ぜられているのです。人を恐れずに、全知全能の主、格別にあなたを愛してくださる神を恐れ、お従いしていきましょう。

第二に、「聖霊をけがす者は赦されない」ということについてです。

これはよく疑問に出される事です。人の子(キリスト)をそしることがあっても赦されたとしても、聖霊をけがすことは赦されない、とはいったいどうしてなのかということです。語られている文脈に従って考えていくと、既に記したように、キリストをそしる人というのは、まだキリストを知らない人、あるいはまだよくキリストを知らない人です。その人のそしりの言葉については、キリストは受容されるというのです。しかし、既にキリストの恵みを知り、救いに与かり、たくさんの祝福をいただいている人については別です。その人は恵みを知っていながら、拒否するのですから、それは聖霊を冒瀆しているのです。それについては、赦されることはないとお言葉を言われるのです。弟子達の中には、イスカリオテのユダもいました。残念ながら、彼は聖霊を冒瀆したことゆえに、赦されることはなかったのです。ヘブル書 6:5～6 をご覧ください。神の救いの恵みにあずかっている者は、このことを十分に覚えなければなりません。

第三にキリスト教や信仰について弁明を求められた時についてです。

この点については、そのような場面に立たせられた時にはどうすれば良いでしょうか。ある方は、間違ったことを言うてはならないので、対応しないかもしれません。また、ここにあるように何をどう言ったら良いかわからないので、答えないという場合もありましょう。今ここで、キリストは心配せずに、対応しなさい。語るべきことは聖霊が教えてくださるからだといわれます。言い方を換えれば、それは聖霊の働きを知る時でもあります。少なくとも、質問に答えようとすることは、その人が霊的に成長するチャンスです。わからないなら、それを率直に伝えても良いのです。そして、改めて調べたり、学んだりすることもできましょう。また、今朝の週報の裏ページの例のように、自分の証しを伝えるのも一つです。この際、聖霊の助けを信じて、勇気をもって、立証し伝道していこうではありませんか。